



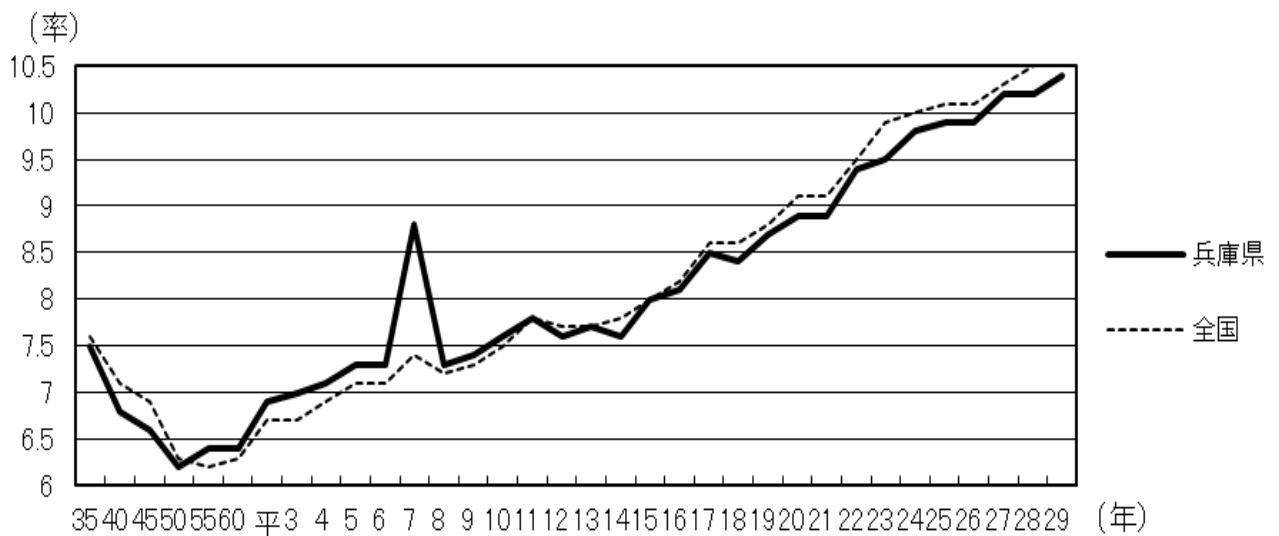
## 死 亡 (第2図)

兵庫県の死亡の状況を年次推移で見ると(統計表第1節第2表)、昭和30年代から50年代前半にかけて死亡数はほぼ横ばい、死亡率は減少傾向であったが、昭和50年代後半からは死亡数、死亡率ともに増加傾向となっている。

なお、平成7年は阪神・淡路大震災の影響で死亡数、死亡率ともに大幅に増加した。

本年は、死亡数56,584人、死亡率10.4で、前年より1,162人増加し、死亡率は0.2上回った。

また、本年も死亡数が出生数を14,979人上回ったため、平成20年以降9年連続で自然減となり、その数は年々増加している。



第2図 死亡率 年次推移(人口千対)

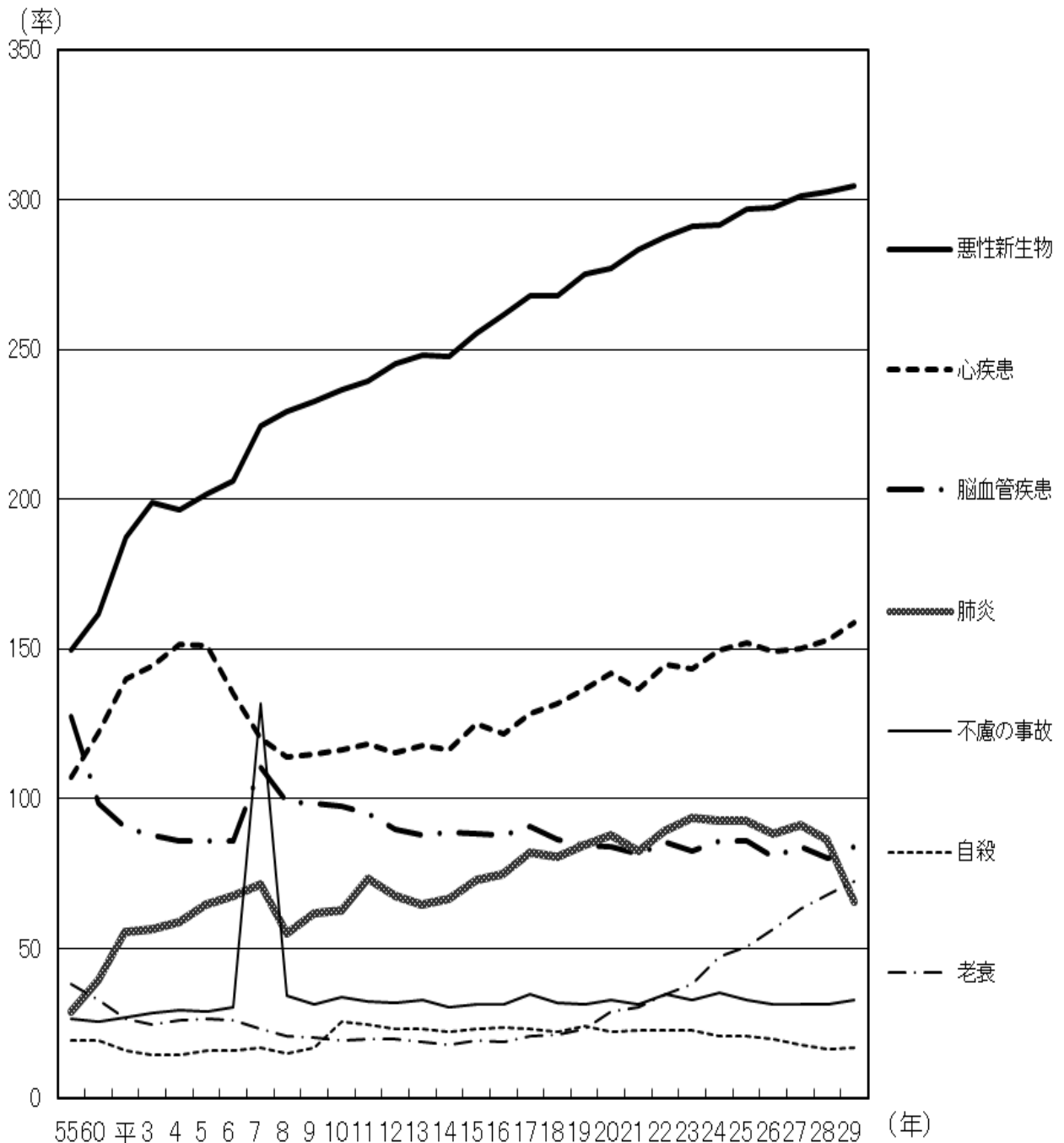
表1 圏域別の主な率

	出 生		死 亡			死産率 (出産千対)	婚姻率 (人口千対)	離婚率 (人口千対)
	出生率 (人口千対)	低体重児 の占める 割合(%)	死亡率 (人口千対)	乳 児 死亡率 (出生千対)	新生児 死亡率 (出生千対)			
総 数	7.7	9.4	10.4	1.4	0.6	19.2	4.7	1.70
神 戸	7.4	9.8	10.0	0.8	0.0	18.4	4.7	1.81
阪 神 南	8.2	8.7	9.6	1.8	1.1	18.8	5.3	1.74
阪 神 北	7.5	9.7	8.8	0.9	0.7	16.5	4.0	1.48
東 播 磨	8.1	9.3	9.4	1.7	0.9	22.7	4.9	1.68
北 播 磨	6.6	9.3	11.3	1.1	0.0	16.7	4.0	1.55
中 播 磨	7.9	9.4	10.5	1.3	1.1	20.4	5.1	1.69
西 播 磨	6.3	10.1	12.7	1.9	0.6	26.1	3.5	1.33
但 馬	6.7	9.0	15.4	0.9	0.0	16.7	4.0	1.32
丹 波	6.8	9.6	13.8	2.8	0.0	13.9	3.8	1.52
淡 路	6.7	9.3	15.0	4.6	2.3	19.0	3.4	1.31

注) 諸率の算定にあたって、総数は平成29年10月1日現在推計日本人人口(総務省統計局)を用い、各圏域については推計人口(兵庫県統計課)を用いた。また、死産率の算定には、出産(出生+死産)千対を用いた。

死亡率を圏域別にみると（表1）、但馬、淡路、丹波、西播磨が高くなっている。死因別では（第2-1図、次頁表2-1）、いわゆる3大死因（悪性新生物、心疾患、脳血管疾患）が全体の52.4%を占めている。また、3大死因（悪性新生物、心疾患、脳血管疾患）の死亡数及び死亡率は、前年を上回った。

老衰による死亡数は3,935人で3大死因に次いで多く、昨年より238人増加し、平成17年以降毎年増加している。肺炎による死亡数は3,544人で前年より1,148人減少した。自殺による死亡数は904人で前年より12人増加した。



2 第2-1図 主な死因別死亡率 年次推移(人口10万対)

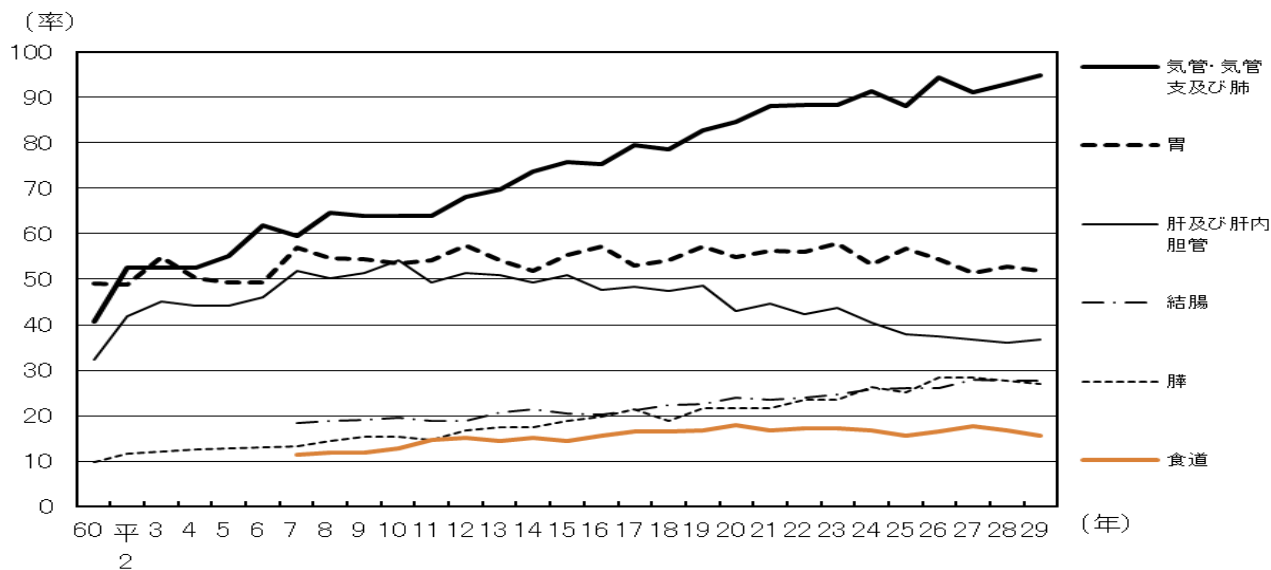


## 悪性新生物（第2-2図、第2-3図）

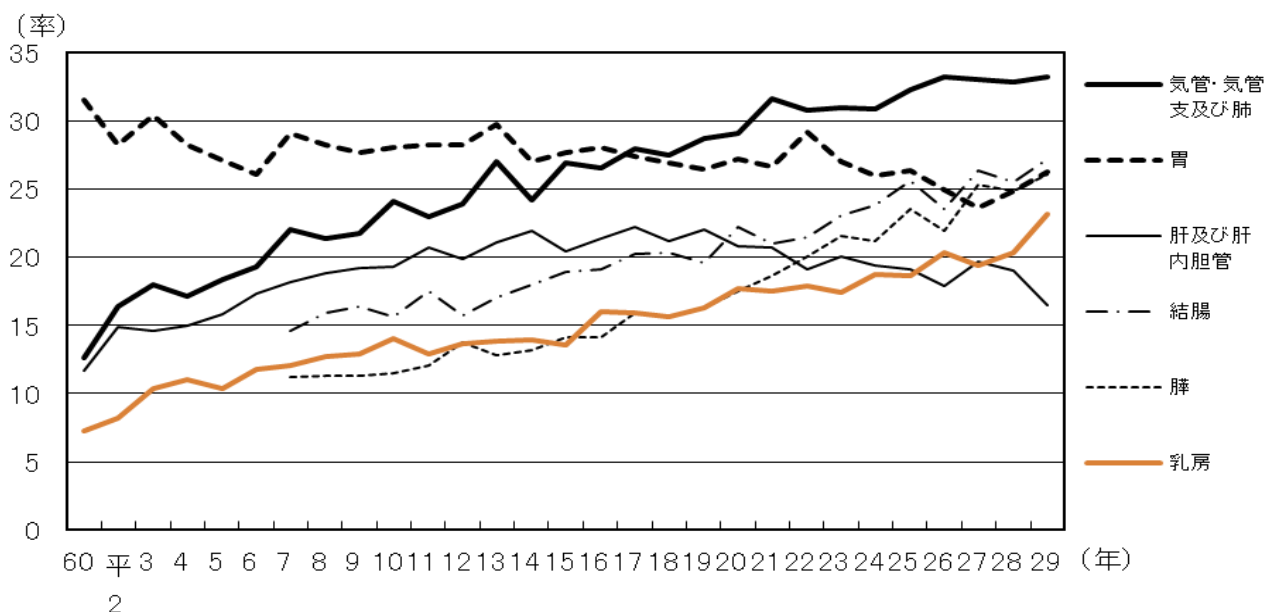
兵庫県においては、昭和53年に悪性新生物が死因順位第1位となって以降死亡数はほぼ毎年増加しており、本年も16,513人と前年より52人増加した。また、死亡率（人口10万対）でも、304.8と前年を上回った。

死亡率（人口10万対）を性別にみると、男が378.4、女が237.8と男が大きく上回っている。

部位別では（表2-2）、男は気管・気管支及び肺が94.7、胃が51.8となっている。女では、気管・気管支及び肺が33.2、胃が26.2となっているほか、結腸が27.2で胃の死亡率を上回っている。



第2-2図 悪性新生物の主な部位別死亡率(男)  
年次推移(人口10万対)



第2-3図 悪性新生物の主な部位別死亡率(女)  
年次推移(人口10万対)



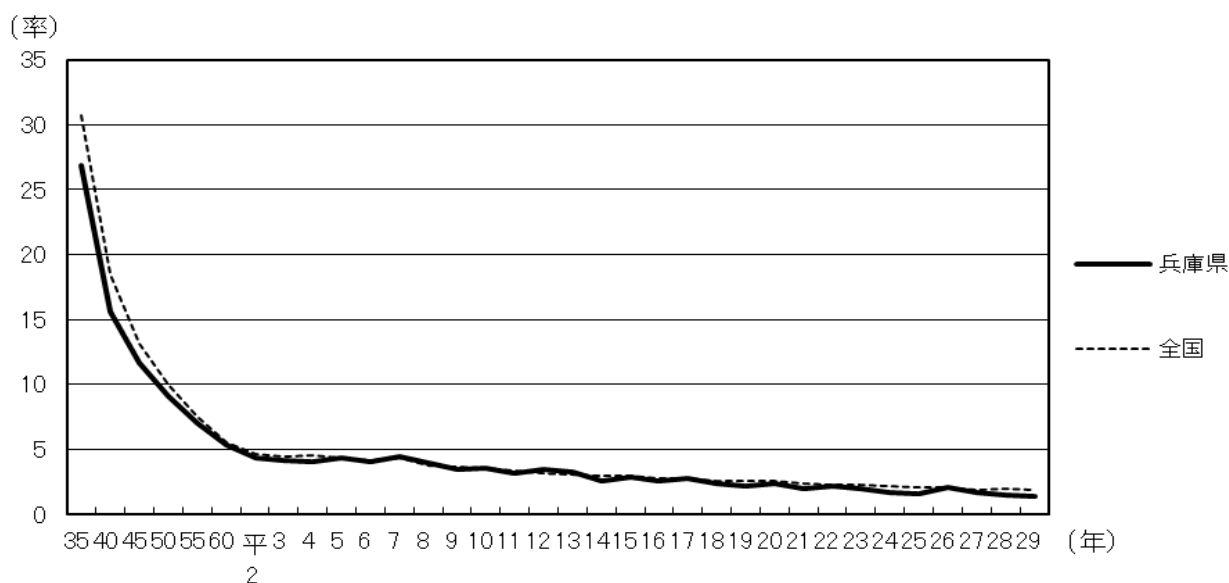
### 乳児死亡（第3図）・新生児死亡（第4図）

乳児死亡とは生後1年未満の死亡をいい、新生児死亡とは生後4週未満の死亡をいう。いずれも率は出生千対で計算される。

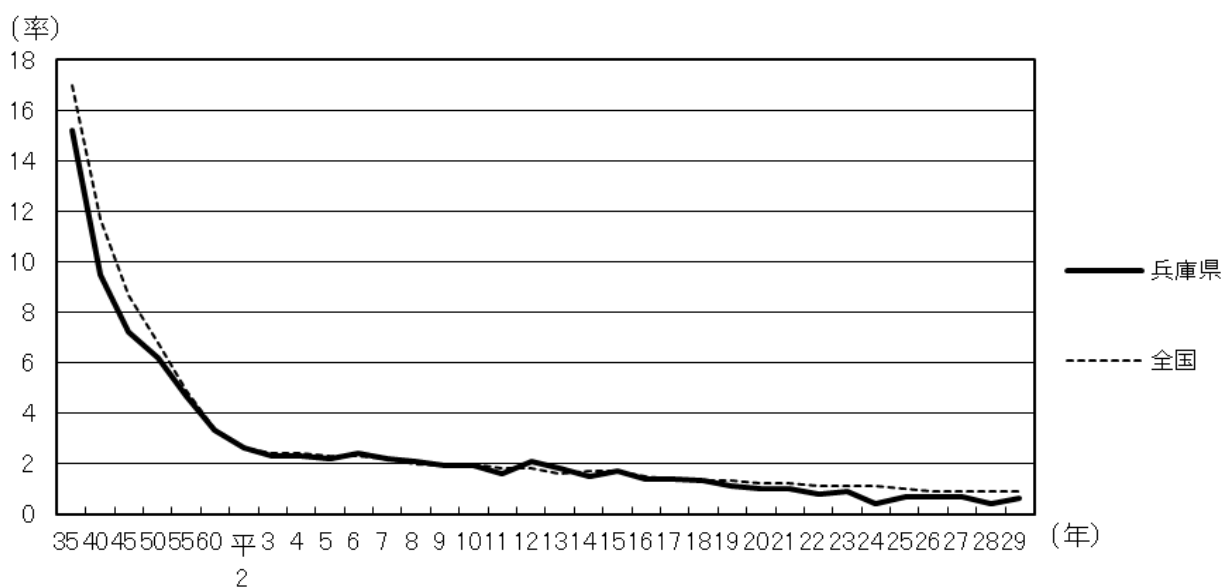
兵庫県の乳児死亡の状況を年次推移で見ると（統計表第1節第2表）、平成2年までは死亡数、死亡率ともに年々減少し、それ以降は平成7年まで横ばいの後、再び減少傾向にあり、本年は、死亡数57人、死亡率1.4といずれも前年を下回った。

一方、新生児死亡の状況を年次推移で見ると（同第2表）、乳児死亡とほぼ同様の傾向となっている。本年は、死亡数26人、死亡率は0.6と、前年を上回った。

圏域別にみると（表1）、乳児死亡率、新生児死亡率ともに淡路が高くなっている。なお、神戸、北播磨、但馬、丹波は新生児死亡数が0であった。



第3図 乳児死亡率 年次推移(出生千対)



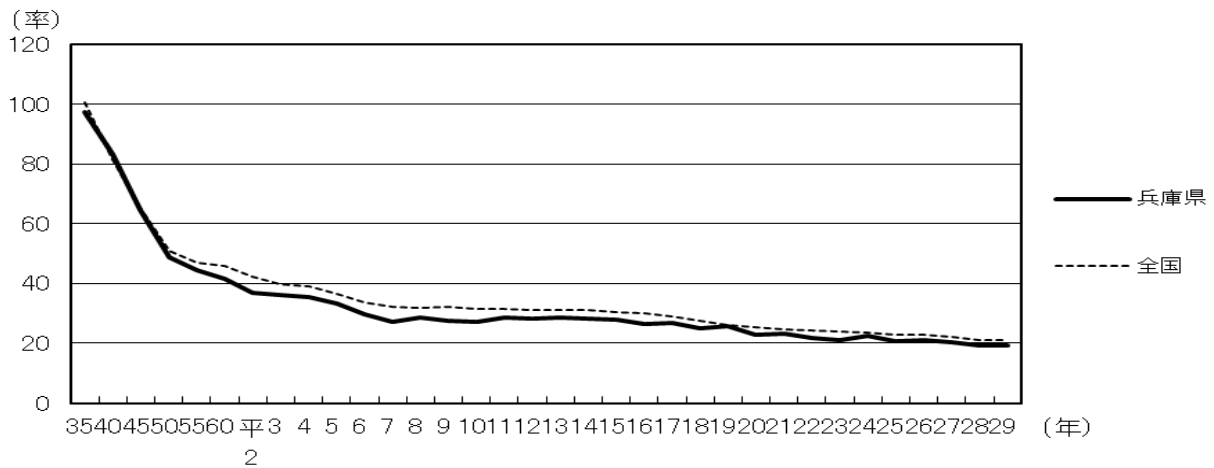
第4図 新生児死亡率 年次推移(出生千対)

## 死産（第5図）

死産は妊娠満12週以後の死児の出産をいい、自然死産と人工死産とに区分される。死産率は出生数に死産数を加えた数を分母とし、率は千対で計算される。

兵庫県の死産の状況を年次推移で見ると（統計表第1節第2表）、平成8年までは死産数、死産率ともに減少傾向にあり、その後しばらく横ばいとなっていたが、平成16年から再び減少傾向に転じている。

本年は、死産数は813胎、死産率は19.2と死産数、死産率とも減少した。死産率を圏域別にみると（表1）、西播磨、東播磨、中播磨が高くなっている。



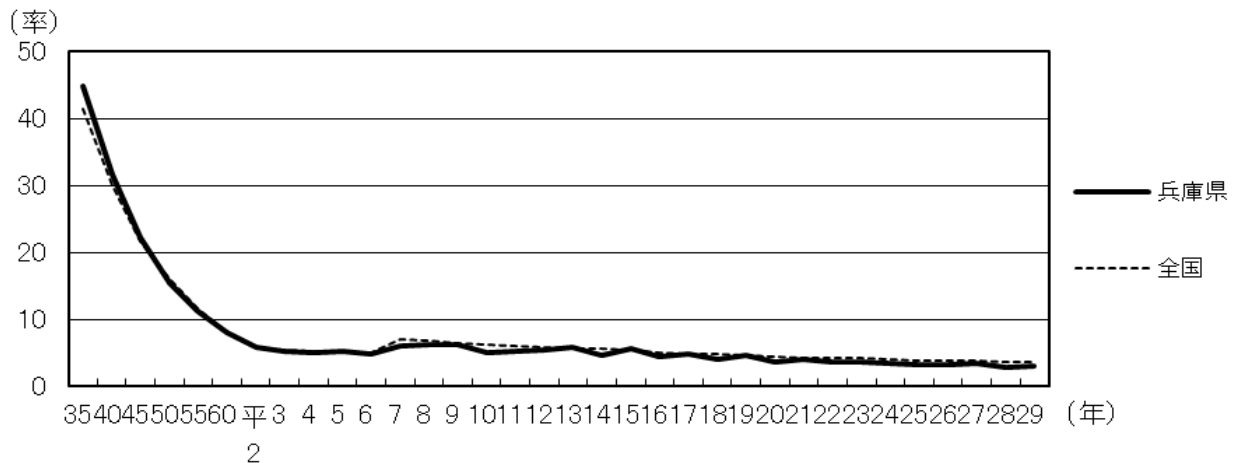
第5図 死産率 年次推移(出産千対)

## 周産期死亡（第6図）

周産期死亡とは、妊娠満22週以後の死産と出生後7日未満の早期新生児死亡の合計をいい、周産期死亡率は出生に妊娠満22週以後の死産を加えた数を分母とし、率は千対で計算される。

この周産期死亡は「出生をめぐる死亡」といわれ、母子保健水準の重要な指標となっている。

兵庫県の周産期死亡の状況を年次推移で見ると（統計表第1節第2表）、平成3年までは周産期死亡数・死亡率ともに減少の傾向にあったが、以降はなだらかな増減を繰り返した後、平成20年から10年連続で200胎（人）を下回っている。本年は、周産期死亡数120胎（人）、周産期死亡率2.9で、数は同じで率は前年を上回った。



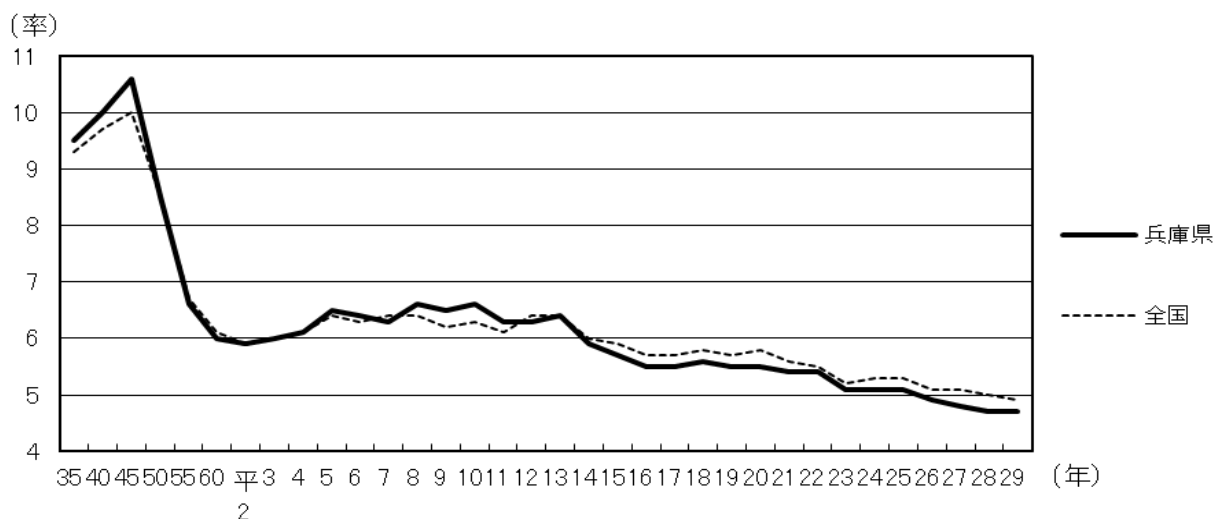
第6図 周産期死亡率 年次推移(出産千対)



## 婚 姻 (第7図)

兵庫県の婚姻の状況を年次推移で見ると(統計表第1節第2表)、婚姻率は昭和29年以降上昇し、昭和46年には11.1と戦後に次ぐ第二の婚姻ブームを迎えた。その後減少傾向を示したものの、昭和53年以降は5.6から6.9の間で増減を繰り返し、平成14年に再び減少傾向に転じている。

本年は、婚姻件数25,480組、婚姻率4.7と件数は前年を下回り、率は同じ、昭和31年以降で最低の水準となった。圏域別にみると(表1)、婚姻率は阪神南、中播磨が高くなっている。また、初婚・再婚の組合せ別で見ると(同第28表)、総件数に占める夫妻ともに初婚の組合せの割合は、本年は73.6%であった。

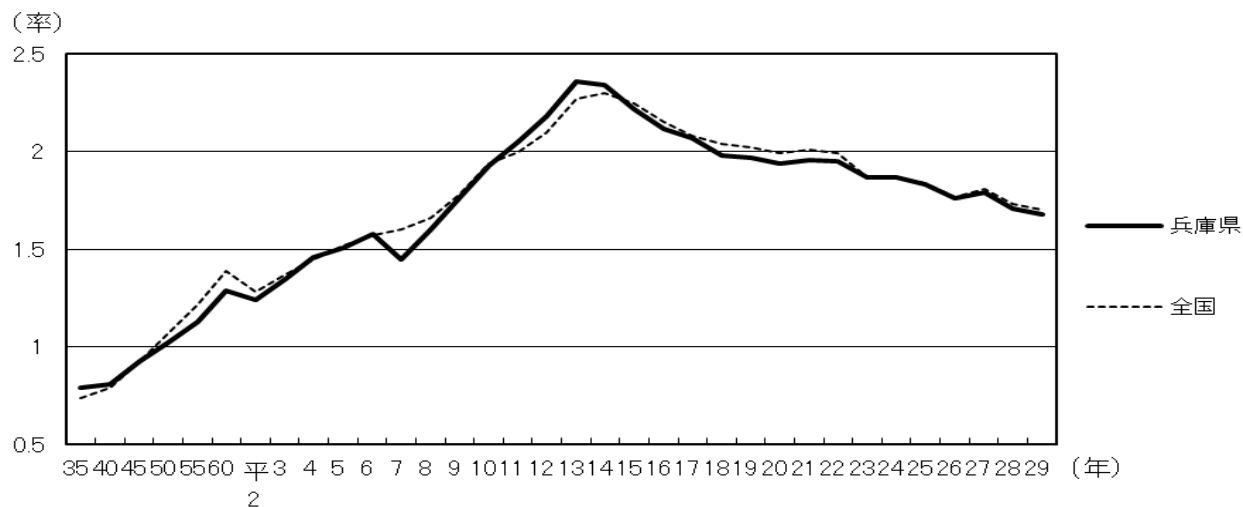


第7図 婚姻率 年次推移(人口千対)

## 離 婚 (第8図)

兵庫県の離婚の状況を年次推移で見ると(統計表第1節第2表)、昭和50年に離婚率が1.0を超えて以降増加傾向が続いていたが、平成13年をピークとして以降減少傾向となっている。

本年は、離婚件数9,113組、離婚率1.68で件数、率とも前年を下回った。圏域別にみると(表1)、離婚率は神戸、阪神南が高くなっている。



第8図 離婚率 年次推移(人口千対)